

人であらう奏

vol.56



石沢孝浩さん(山形市)

昭和42年生まれ、山形市出身・在住。「東沢古道保存会」会長。「テレマーク & マウンテンガイド IDEHA」主催。「東沢古道保存会」は2018年12月に発足し、「蔵王古道」を整備し山岳観光資源として地域の発展に寄与している。また、登山ガイド、バックカントリースキーツアーガイドのほか雪崩事故防止講習会などを開催している。日本山岳ガイド協会認定ガイド、東北山岳ガイド協会会員、日本テレマークスキー協会公認指導員。



山岳ガイドでもある石沢さんは「やまがたカルチャー&健康スポーツセンター」で『基礎から学ぶ安全で楽しい登山』の講師も務める。座学と実践登山を通して、基礎から山登りの実力を身に付けていく教室。写真は参加者と鳥海山山頂で。

自然と歴史を組み合わせて新たな地域資源に

信仰の道「蔵王古道」を再生し地元の活性化に取り組む石沢さん、地域おこしの拠点となるカフェを営みながら、三淵渓谷の美しさと歴史を伝える横山さんにお話しをうかがいました。



横山直幸さん(長井市)

昭和50年生まれ、長井市出身・在住。「春まちカフェ」を営みながら、高齢者の集いの場や街おこしイベントを企画・運営。また、地元NPO「最上川リバーツーリズムネットワーク」の三淵渓谷ツアーの船頭・観光案内人を務めるほか、里山を中心に地域を巡るサイクリングツアーを開催するなど、地域と自然と人をつなぐ地域密着型の事業を行っている。山形鉄道フラワー長井線の元車掌兼観光ガイド。



三淵渓谷ボート参拝ツアーは、環境に配慮した電気モーターの船外機を使用して運航する。新型コロナウイルス感染対策のため、現在は貸し切り予約のみ(7月末時点)。写真は渓谷の入口、岸壁がそびえ立つ狭間を進んでいく。

地元の文化の掘り起こし、活性化が活動の発端

山形市東沢地区の宝沢には、蔵王詣での最古の登拝道と伝わる宝沢口があり、その歴史は奈良時代までさかのぼります。石沢さんは言います。

「加茂雷神社には、明治33年に奉納された大絵馬が残っており、蔵王最高峰の熊野岳山頂まで続く白装束の参拝者の列が描かれています。しかし、昭和初期以降は使われなくなり、70年以上放置されていました。ヤブで覆われ失われていた古道を、地元の人に聞いたり踏み跡を探しながら復活させました」。

保存会には、地元在住の正会員20名、ファンクラブ30名ほどが参加し、整備や研修会を行っています。

一方の横山さんは、進学、就職で地元を離れていましたが、帰省のたびに活気を失っていく故郷を何とかしたいとの一念でUターンしました。

「現在は『春まちカフェ』を、山形鉄道応援と地域を元気にする拠点として、商店街とのコラボ市など、さまざまな事業を行っています」。

自然と歴史の両面から地域の魅力を再発見

自身の活動に加え、ボートによる三淵渓谷参拝ツアーにも関わる横山さんは、その魅力をこう話します。

「渓谷は長井ダムの最奥にあり、断崖絶壁からなる神秘的な絶景。秋には見事な紅葉に囲まれます。また、長井の伝統行事『黒獅子舞』のルートと伝わる三淵神社が渓谷入口の高台にあり、自然と町の文化、地域の歴史が深くつながっていることを教えてくれます」。

石沢さんがこれに応えます。「私は、ツアーガイドなどで山に入るとき、必ず一礼します。登山道の多くは古からの祈りの道で、山登りとしての楽しみだけではなく、お山参りの歴史や由来を知り、先人たちと同じ思いを共有できる魅力があります。山岳観光資源として、その両面が必要だと思えます」。

「今、見えている自然の魅力に加え、その背景を知ること、楽しみ方にさらに奥行きが生まれますね」。そう横山さんも声をそろえます。

県民一人ひとりが山形の自然案内人に

石沢さんが言葉をつなぎます。「歴史や先人を想うと、整備と言っても、コンクリートの道にはしなくてもいいはず。昔の自然のままの道として必要最低限の整備に抑えるよう心がけています」。

また、活動を続けるうえで大切なのは人だと考えています。現在は、さまざまな職業、経験をもった地元の人たちが関わり、新しいアイデアや活動の幅が広がっています。今後は古道案内ガイドの育成にも積極的に取り組んでいきたいと思えます」。

横山さんも大きくうなずきます。「同感です。私の活動も人とのつながりからジャンルが広がっています。県外に一度出て感じたのは、山形県には山・川・海・空と、アウトドアの選択肢がそろっていること。年齢や体力に合わせた多彩な楽しみ方ができます。自然の素晴らしさを体験し、県民のみんなが案内人になれるといいですね」。

